

文化・芸術

「死について第2部第10葉・死せる母親」

1898年、エンクレーピング
紙、38・5cm×29・7cm

マックス・クリンガー

(1857～1920年)

19世紀末のドイツの芸術家マックス・クリンガーは、生涯の全時期にわたって版画を手掛けました。あえてデューラーの時代の連作版画の様式をとり、複数の画面構成による物語性の強い作品を展開します。その画面は装飾性と写実性との融合、現実と非現実を溶け合わせるなど、異なるものが混然一体となり一つの独特の世界を形成しています。

本作は、クリンガーの版画作品。1889年出版の「死について」第1部では日常の中で突然訪れる死が描かれたのに対し、本作では病気や戦争をはじめ社会や人類に対して災禍として降りかかる死が描かれ、その恐怖からの解脱も示唆されます。《死せる母親》では、静かに目を閉じ硬直して横たわる母親の上に、柔らかな赤子が乗り、その目は光を宿してこちらに向けられます。子は背後に広がる林の中に伸びる若木と重なるように描かれ、死と新たな生命がつながっていることが暗示されます。

次回のコレクション展で展示いたします。
(大谷)

《名画の扉》

大川美術館コレクションから

